

## 市史編さん便り

第3号 2020年6月17日(水)発行  
土佐清水市教育委員会生涯学習課  
市史編さん室

### ☆旧大津小学校の『学校日誌』等の学校史資料を一次保存作業が完了！

6月12～13日の2日間にわたり県内学校・高知城博物館・歴史民俗資料館・高知ミュージアムネットワークなどに所属する県内歴史研究者でつくる「高知県学校資料を考える会」の協力を得て、本市教育委員会が「旧大津小学校の『学校日誌』等の学校史資料」を回収して、中浜小学校2階の空き教室に一次保管した。移設した学校史資料は、段ボール箱で約60箱近く、地



中央公民館3階多目的ホールで開催された協議会

元で採れた貝殻で作製した壁飾りもあった。うち、段ボール箱8箱分の1次目録と、明治初期の『学校日誌』の記録撮影が収録した。「高知県学校資料を考える会」は、今後も本市を訪問し、当教育委員会と連携して保存活動に協力してくださる予定である。

#### —学校史資料保存のための協議会出席者及び作業参加者—

◇協議会（石畑氏までは全員が作業参加者、それ以降は※印の付いた人が作業参加者。）

筒井秀一（こうちミュージアムネットワーク代表・自由民権記念館館長）、渡部 淳（高知城歴史博物館館長）、高木翔太（高知城歴史博物館学芸員）、片岡剛（高知城歴史博物館学芸員・地域歴史文化調査支援室）、筒井聡史（高知城歴史博物館企画員）、谷地森秀二（四国自然史科学研究センター専門職員）  
福田 仁（高知新聞編集局学芸部記者）、楠瀬慶太（高知新聞編集局学芸部記者）

石畑匡基（県立歴史民俗資料館学芸員・博士）

弘田浩三（土佐清水市教育委員会・教育長）、田村五鈴（土佐清水市教育委員会・生涯学習課長）、

田村公利（土佐清水市教育委員会・生涯学習課市史編さん室長）※、

由岐直久（土佐清水市教育委員会・生涯学習課市史編さん係長）、

谷岡暁美（土佐清水市史編集委員・学校教育史担当）※、

岩井拓史（土佐清水市史編集委員・民俗災害史担当、土佐清水市立中央公民館長）※

#### ◇作業参加者

森口夏季・今井悟（土佐清水市国立公園ジオパーク推進課専門員）、

武藤 清（土佐清水市郷土史同好会会長・土佐清水市文化財審議委員）、

山崎彩加（高知新聞社土佐清水支局長）、

池内正樹（土佐清水市教育委員会・生涯学習課補佐）

## ◎市史執筆のブレイクタイム(3) 歌人・今村樂<sup>たぬし</sup>（鏡月）

賀茂真淵は、古道を学び、それを国学として体系化し、学問として完成させた。真淵は、儒教的思想を排除し、日本の古典には日本人本来の精神が宿っていると考え、『万葉集』研究を生涯続けた。彼は、和歌は古人の心を知らなければならないとし、古典は古代人の心を読み取ることができる意義があると説いた。

この真淵に入門したのが、近世後期の医者であり、国学者である本居宣長である。宝暦13年（1763）、宣長34歳の時、賀茂真淵が旅行中で松坂（三重県）に投宿した折に对面、その後、真淵を師事し、文通を通してその教えを受けた。内容は、『万葉集問目』にまとめられている。契沖の文献考証と真淵の古道学の研究を深め、国学を大成した。国学の学問内容を(1)神学、(2)有識の学、(3)記録、(4)歌学の四つに分類している（『初山踏』）。また、起草して34年の歳月をかけ、69歳にして『古事記伝』全44巻を完成させた。土佐藩の役人として京都に単身赴任した藩士・今村樂（鏡月）はその赴任中に本居宣長の門を叩き、その教えを受けている。



中浜小学校下に所在する今村樂の墓碑

今村樂（1765－1810）は、御歩行格・今井勘兵衛の長男として高知城下水通町（高知市）に生まれた。2歳の時に父が逝去した。国学・漢学を谷真潮に、医学を桑名玄井に学んだ。母の死後、高岡村（現在の土佐市）に移住し、医者として開業したが、寛政11年（1799）、34歳の時に跡目を継ぎ、城下に戻った。その後、藩命により京都大通院警備下役として上京、一旦帰還するも、京都藩邸小留守居役に任ぜられて再び上京する。京都に在任中、本居宣長の門を叩き、弟子入りした（註1）。享和3年（1803）夏、京都四條の宿で57人にて行われた歌会で樂は次のような歌を詠んだ。この歌会でのお題は、「鴨川の納涼」と「嵯峨の山松」であった。

打ちわたす大堰の橋に駒とめてあわれとそ見る嵯峨の山松 樂

この歌を宣長は「土佐人秀逸」と評価した。またある時、宣長が判師となった鬮歌の大会では、樂は伊勢国在任の「和歌の大家」荒木田久と決勝で争った。老練な荒木田は弁舌滑らかに樂の歌を理論的に批判した。しかし、樂は一言も抗弁せず、「この歌にて我既に心に勝てり、何ぞ多弁を用いんや」と一言述べて沈黙を守った。最後に宣長の判定により樂の勝利が高々と宣言された。その紳士的な姿勢が参加者一同からさらなる高評価を得た（註2）。

文化元年（1804）、京都土佐藩邸小留守居役在任中、下僚の藩士が藩金を費消したことに責任を問われ、土佐へ帰国し、渡川（四万十川）以西に追放刑となった。具同村（四万十市具同）、下茅村（土佐清水市下ノ加江）と転々と移住し、大浜村（土佐清水市大浜）で終焉を迎えた。ここで浦庄屋沖家や在地の廻船商人・袋屋九郎丞の支援を受けながら、医業と寺子屋をして何とか生活することができた。文政7年（1810）11月13日、46歳にて大浜の地で逝去する。生前に樂を歌の師と慕った清水浦庄屋浜田千東に自筆の文字を墓碑に刻み込むように託したと伝えられる。彼の墓碑は、中浜・長崎台地上の中浜小学校南側に位置する山城屋墓所近くに所在している。

そこひなく濁りつくしてかゝみ川みなもと遠く月はすみけり【今村樂の辞世句】

「かゝみ川」とは高知市を流れる鏡川のことを指し、「土佐藩の政治体制の腐敗」を意味していると思われる。「みなもと遠く月はすみけり」とは遠く土佐清水市で生きている自分の心境を表現したものであろう。彼の死後、藩金費消の再調査が行われ、その全容が樂には全く関係ないことが分かり、特例措置をもって死後の赦免が命じられた。また、藩によって義母の外孫・植田右馬之助に家名を継がせる配慮がなされた（註3）。樂と歌を通じて交流があった人物は、三崎村矢野川正徳・沖市左衛門、清水の浜田千東・松川世美など市域に居住する庄屋や浦郷の錚々たる有力者たちであった。

註1. 中山進「四. 近世」（『土佐清水市史上巻』土佐清水市、1980年、658－666頁）

註2. 註1に同じ。

註3. 註1に同じ。